

義堂周信と清原良賢

— 清家学成立の契機 —

和 島 芳 男

元徳二年（一一三〇）五月二日書写畢、于_レ時五月雨閑降、郭公雲外過矣

良賢 廿一（花押）

（朱）同十四日酉下程朱点了

右は宮内庁書陵部蔵良賢自筆自点『古文孝経孔伝』一卷の奥書である。本抄本にはこれに続いてなお数々の識語がある。いまそのうち主なるものを採って本書の由来を概説すれば、まず寛治五年（一一〇八九）九月、大江通景が直講清原定康の本を読み、これを貢士藤原以通に伝授したので、その代わりに永久四年（一一一六）五月、通景が新たに本書を写して右の定康本から移点し、かつ仮名を付し、これを自家の定本とした。下って弘安二年（一二七九）九月、散位藤原忠長は通景本を伝受の後、濃墨をもって新点を加えたが、古点ももとのままに存した。そしてこの年十二月、忠長は直講清原隆宣所蔵の累代の家本と校合して朱点を附し、これを自家の証本とした。この隆宣本の本奥書には「保延二年（一一三六）八月五日庚子、以_二中家本_一移点了、同廿日乙卯、見_二合家本_一了、東市正清原頼滋」、「保延四年三月八日申刻、見_二合或本_一了、頼業」、「仁平元年（一一五七）十五十六引_二合述議_一読上了、但喪親章不_二勘改_一而已」と見え、最後に「永仁二年（一二九四）七月六日、授_二申池藤才子_一了、散位（藤原）長英」の一条ををもって終っている。

もし元徳二年五月良賢の自写自点に成る本抄本が、清原隆宣の累代の家本と校合した藤原忠長本を祖本とするものとするれば、右の良賢はいか

にも清原頼業九代の孫良賢であるかのごとく見受けられる。しかるに『康富記』文安元年（一四四四）十月条に、「廿三日戊辰、晴、参伏見殿、来廿九日故大少納言入道殿常宗（清原良賢）十三回正忌也、仍自是日一七ヶ日昼夜不断光明真言被始行之」という明文があり、良賢の没年は永享四年（一四三二）であることが知られる。『系図纂要』に従って行年八十五歳とすれば、良賢の出生は貞和四年（一三四八）のこととなる。従って元徳二年（一三三〇）『古文孝経』を書写し加点了良賢は明らかに別人でなければならぬ。しかし『清原系図』諸本をたずねても、良賢以前に良賢の名は見いだされない。よって「良賢」の名を広く他姓にもわたって検索したところ、『尊卑分脈』撰家相統孫二条家の条に^⑤関白道平の弟良賢を見いだした。道平は建武二年（一三三五）四十八歳で没したから、元徳二年には四十三歳であり、弟良賢がこの年二十一歳ならば両者の年齢には父子ほどの開きがある。或いは異母兄弟かと考えられもするが、良賢の母の名は不明である。今日のところでは書陵部蔵『古文孝経』の手抄者が清原良賢その人でないことを断定するにとどめておくべきであろう。^⑥

〔注〕

- ① 足利衍述『鎌倉室町時代之儒教』附録二六ページに本抄本の跋文全部を載せる。但し「良賢」の下の「廿一」は脱落している。
- ② 『尊卑分脈』（国史大系本第二編三三三ページ）に「足田以成、実織部正大江通景子」と見える。
- ③ 同（第四編一五八ページ）に「助教、直講、大外記、彈正忠、従四位下、天永四年（一一一三）正月四日卒、七十二歳」とある。
- ④ 同（第二編四五二ページ）に従五位下（藤原）以通が載っている。
- ⑤ 同（第一編九六ページ）。
- ⑥ 以上の考察のためには大西祝夫、阿部隆一両氏から有益な示唆・助言とともに必要な史料・文献の複写を送っていただいた。ここに附記して謝意を表す。

二

明経家の嫡流に生まれた清原良賢の学問を明らかにするためには、まず叢林の儒僧として知られる義堂周信の業績を顧みなければならない。本邦における宋学の受容が宋朝の学者からの正統的伝承によらず、わが入宋僧にして禅法をかの地に求めた者や、かの国から渡来した禅僧たちの提唱にまつたことは、中世の思想史・宗教史上に顕著な事実である。叢林の学僧がかくも宋学に心を寄せたのは、いうまでもなく唐宋時代の儒道仏三教の交渉の一端としての禅儒融合の勢がわが国に及んだものと考えられよう。しかし過去数世紀にわたり、顕密諸宗の祈祷・修法や浄

土教の念仏のみに慣らされたわが貴族層にとっては、禪の直見心性宗はほとんど理解の外であった。こういう檀那たちを禪門に導くためには、まずかれらの権門の治道の学としての儒学に関する素養に訴えながら、努めて儒仏の一致に言及し、次いでこの儒学が哲学的に再組織された宋代性理の学が、その心性の学たる点において禅学と融合すべきことを説き、進んで宋学の哲学的神髓が禅学に得たものであることを高唱し、ついにかれら権門をして禅宗に帰依せしめるのが有効にして適切な順序であった。^①

まず俊芿は正治元年（一一九九）入宋、天台山・径山において禅要を受け、翌年四明山にて律を学び、更に天台の教観を精習し、この間程朱学に通じた禅僧北磻居簡にも親しみ、あたかも朱子の遺著論孟集注・学庸章句が刊行された嘉定四年すなわちわが建曆元年（一二一一）に帰朝、やがて泉涌寺を中興した。俊芿がかの地からもたらした二千余巻の書籍の中には律・天台・華嚴の三部合計一千三百二十二巻、雜書四百六十三巻のほか儒道書籍二百五十六巻があり、かれの入京後左大臣徳大寺公継の求めにより法談のとき、「筆精之義、宋朝之談、日新月故、聲々不_レ怠、五經三史奥粹、本朝未談之義、法師甫陳、左府聞_レ之、無_レ不_レ嘆息、漸入_レ仏教、大小両乘、教禪二門、貴望叩問、随_レ叩而応、罔_レ有_レ遺滞」という状況であったことから俊芿をもって本邦における宋学の首唱者とする説は今も行われている。しかし彼が将来した儒道書籍はその書目も明らかでなく、従って「宋朝之談」は必ずしも宋儒新注の談義とは限られず、ただ宋朝流行の儒道仏三教交渉の論理をわが国に初めて開顕したが故に「本朝未談之義」と評判されたのであろう。左大臣がこの後あえて儒教に向わず、むしろ「漸入_レ仏道」だったことも、ここに考え合わさるべきである。^②次に円爾は宋西の高足宋朝・行勇に就いて密宗を学び、嘉禎元年（一二三五）入宋、径山の無準師範のもとに参禅六年、傍ら戒律・天台を学び、多くの典籍を携えて仁治二年（一二四一）博多に帰着、次いで禅法を提唱した。特に前関白九条道家は一寺を建立して天台・真言二宗を置くことを志し、その開山たるべき傑僧を求め、やがて円爾を東福寺に迎えてここを台・密・禅三宗兼学の道場とした。元来円爾はその少年時代は既に「禦_レ外侮」ぐために儒学を勉強したし、また彼の在宋中の師無準は「三教聖人、同一舌頭、各開_レ門戸」、鞠_レ其旨歸、則了無_レ二致」と断じた人であったから、円爾が宋土から携え帰った典籍もおのずから広く三教にわたった。今日東福寺常楽庵に伝わる『普門院經論章疏語録儒書等目錄』に収載される三百三十九部一千余巻の書目は右の円爾将来の諸書のうち鎌倉時代末期に残存したものを主要部分とすると考えられ、その儒書に属するもの二十余部の中には朱注の四書など数冊も見えるが、それらの多くは今伝わらず、円爾がこれらの新注書をいかに活用したかは、うかがうべくもない。しかしここに注目すべきは、さきに寛元三年（一二四五）円爾が後嵯峨天皇に『宗

『鏡録』を進講し、その後正嘉元年（一二五七）には鎌倉に招かれ、執権北条時頼のために『大明録』を講釈したことである。『宗鏡録』は五代、宋初の禅僧永明延寿が大乗経論三千部のほか、広くインド・中国の聖賢三百余家の語を引いて教禅二門融合の理を示したもので、台・密・禅三宗兼学の東福寺の宗旨を宣明するために有用であり、『大明録』は南宋の居士奎堂が初心者に仏教の要義を説くために儒道仏三教の相似点を挙げており、若き執権の道心を啓発するに好適の書であった。なお後年、文永五年（一二六八）、円爾は権大納言堀河基具の間に応じ、三教要略を述べてこれを呈した。これまた円爾の博学をもってして始めて成し得たところであろう。この前後、寛元四年（一二四六）には蘭溪道隆、弘安二年（一二七九）には子元祖元が渡来した。二僧はいずれも円爾と同門で、それぞれ執権時頼・同時宗の帰依を得、蘭溪は『大学』の「正心誠意」を引いて学問の要はこれにありとし、子元は宋儒張横渠の説に想を得た「心即太虚」の観を立てるなど、しきりに儒語を用いて禅理を説いた^⑤。公武の貴顕の間に、儒仏・禅儒の一致・融合の道理が比較的に難なく受容せられるについては、無準一門の活動があずかって大いに力があつたのである。

このように儒仏ないし禅儒の関係についての論議の間にわが有識層に親近した禅徒が、更に進んで儒学を批判し、儒教が仏教に、宋学が禅学に及ばぬゆえんを追求したのは自然の勢いであろう。わが禅僧にして最も早く宋学を論じたのは虎関師錬である。虎関は少年時代から円爾の高弟東山湛照のもとで外学を兼修したが、師の没後は建仁寺無隠円範に侍する間に源有房から『易経』および卜筮の秘説を授けられた。いうまでもなく宋学の成立は易学研究をその端緒とし、二程子および楊敬仲の易説はその重要な階梯を築き、殊に程伊川の所論は華嚴宗に立脚し、すなわち禅の直観心性宗と相表裏するものであった^⑥。徳治二年（一二三〇七）虎関は鎌倉に下って渡来僧一山一寧に建長寺に侍し、程楊の易説を問ひ、宋学と禅との接点を究めようとしたが、さすがの一山も答えるに及ばなかった。虎関は帰京後元亨二年（一二三二二）『元亨釈書』三十巻を奏進、晩年東福寺、南禅寺に歴住、貞和二年（一二三四六）六十九歳で入寂した。その詩文集『済北集』の「通衡」編は儒道仏三教にわたる彼の博識を見るべき論集であるが、その中で虎関はかの『大明録』が程明道の排仏論を支持した上、「儒教本為人道之宗主」と称揚したことに反対して、儒教は元来中国一域の化で、仏教のごとく閭浮の通典ではなく、その主たり得るのは単に時勢によるに過ぎぬといい、次に鋭鋒を朱子に向け、「朱氏」は晩宋の巨儒と称せられて百家を品評したが、多くは理に当らず、中にもその仏教批判には売名のためのものさえあり、殊に朱子が毎々大慧宗杲の語録を引いて自説を助けながら結局排仏をあえてしたことを指摘して「朱氏非醇儒一矣」と痛棒を加えた^⑦。この虎関の門下に

出て、同じく宋学を批判したのは中巖円月である。中巖は鎌倉に生まれ、少年のときから儒書を習い、密法を学び、次いで建長・円覚二寺で修禪の後上京して虎関の愛顧を受け、やがて入元、在留七年の後、元弘二年（一三三二）帰朝、翌年鎌倉幕府滅亡後、『原民』『原僧』二編を草し、王政の衰廢と仏徒の腐敗を慨し、建武元年（一三三四）『中正子』十編を著し、晩年京中の諸寺に歴住、永和元年（一三七五）入滅、時に年七十六歳であった。右の『中正子』は、『周易』『中庸』を多く祖述して性命・死生の理を説き、殊に孟子以来の性説の誤りを指摘し、また「孔氏之道、与_レ仏相為_二表裏_一、而性情之論、如合_二双璧_一然」にもかかわらず、「然世之儒生、猶不_レ欲_二同焉_一、則無_レ他、以其欲_レ異_二於_レ釈氏_一故也、是非_二君子道_一也」と難じ、外面的なる儒教よりも内面的なる仏教に帰依すべきゆえんを論し、殊に「禪則信而証_レ之、斯而已、固不_レ可_レ言也」であるから、宋儒がいかに孔孟の書を注し、仏教に対して弁難の辞を設けようとも、「苟不_レ得_二仏心_一者、縱使_二親口_一仏語、亦非_レ禪也」と退けている^⑧。虎関が宋儒の仏教に対する態度を論難するに急にしてかれらの学説一般についてはあまり深入りしなかったのに対して、中巖はかなり積極的に宋学に入しつ、しかも儒家のついに仏家に及ばざることを論証するに努めたように見受けられる。しかし虎関にせよ中巖にせよ、その所論のめざすところは儒家の排仏に反発し、彼らの現世的道德教に対する仏家の超脱的心性教としての優越を誇示するに努めたものであり、これをかの無準一門が多く儒仏ないし禪儒の形式的異同を説くにとどまったのに対照すれば、確かに数段の進歩が認められよう。

しかしながら右の虎関・中巖の場合に比べても、みずから宋学の本義をたずね、四書の効用から新古二注の優劣まで会得した義堂周信の境地は更に一層進んだものであった^⑨。義堂は土佐の人、少年にして儒書や『臨濟録』を習い、十四歳のとき落飾、比叡山で受戒、密法をも相承、いよいよ博く書を読むうち禪門に心を寄せ、十七歳のとき夢窓疎石に参じ、師の没後は儒釈兼学の詩僧龍山徳見の教を受け、中巖とも交わった。そして延文四年（一三五九）三十五歳のとき関東管領足利基氏に招かれて鎌倉に下り、円覚寺の首座となり、また瑞泉寺に住した。その後応安三年（一三七〇）一侍者から詩史の講義を求められたとき、かえってこれに仏学を勧め、翌年またある侍者の問に答えて、「凡_レ孔孟之書於_二吾_一仏学_一乃_二人天教之分齊也_一、不_レ必_二専門_一、姑為_二助道之一_一耳、経云、法尚_レ可_レ捨、何況_レ非法、如是_レ講、則_二儒書即_二釈書也_一」といった。しかし多くの弟子の中には外典に興味をひかれる余り、義堂の『円覚経』講説を参聴せぬ者もあった。これについて義堂は「自_レ今誓断_二俗書_一、不_レ然、余必_レ聚_二闍院外典於_二中庭_一而焚_レ之、以供_二天帝_一」と痛責し、ひいて今時のわが徒に坐禅せず看経せず、ただ外学に走る者があるのは正に仏法滅尽の相であると慨嘆した^⑩。このように義堂は自家の門徒に対しては外学をあくまで「助道之一」たるにとどめしめたが、為政者たる武家に対しては

「治道之要」として外学の必修を勧めた。さきに貞治六年（一一三六七）基氏が没して後は義堂は嗣君氏満の輔導に任じ、応安四年（一一三七一）氏満が瑞泉寺に参ったとき、「凡治天下国家、無不以文、先君專勸文学、願繼業、以副外護之望」と請い、特に『貞觀政要』の進講を始め、同七年また氏満に諭して、およそ人、仁義五常の道を知らざれば君命に従わず、自然政事も行われざることゆえ、自今「栗田口儒人」菅原豊長を召して『孝經』『貞觀政要』等を講ぜしむれば「則庶幾国家安章、尊徳日新也」といい、翌永和元年（一一三七五）にはまた故基氏が毎々儒釈等の諸賢宿徳を引き、禪を談じ書を講じて虚日無かりしことを語って氏満もこの先蹤を継がんことを求める一方治国の政要に関する氏満の質問に対しては唐の太宗と日本三代將軍との治世を挙げ、「古今治天下国家、非文武二道則不可也」と説き、「凡人君為上者憫下、為下者敬上、是則非生而知之、以学而知之也、不学而知者、未之有也、千万以学為政之備、則幸甚」と勧めた。なおこれよりさき応安五年（一一三七二）義堂は衆のために『輔教編』を講じ、上杉憲春も来聴した。この書は宋の禅僧契嵩が歐陽修等の排仏に對抗して儒仏二教の対比から儒道仏三教の關係にまで説き及んだものである。義堂がしきりに武家に学問を勧めた目的が、結局彼らが啓発されて儒仏の關係を明確に理解し、ひいて儒教のとうてい仏教殊に禅宗に及ばぬゆえんを悟らしめるところにあるからには、本書のごときはこの目的に最も適合した好資料であった。^⑩

「治道之要」としての学問の効用を説くことは康暦二年（一一三八〇）五十六歳の二月、義堂が將軍義満の命により京都に帰り、建仁寺に住してから変らなかつた。その際義堂にとっての喜びは、義満の学習が既に相当に進んでいたことであつた。さきに応安六年（一一三七三）、義満は觀中中諦を関東に遣わし、義堂とともに称名寺に赴き、金沢文庫本を採訪させた。このとき義満が入手した書目は明らかでないが、彼の好学の志の程は推察するに足りよう。^⑪ 義満は義堂の帰京早々の康暦二年（一一三八〇）四月、大学頭菅原秀長等を召して文談を催し、以後式日定め、しばしば諸儒を会して經書殊に四書の講座を開いた。またこの年八月、義満は等持寺に赴き、『中庸』の講釈を義堂に命じた。義堂はこれを固く辞退したが、諸長老、管領の勧めもあるので、やむなく五六紙を講じた。同年十一月、義堂は『孟子』を読むことを義満に勧めた。義満は諸儒の『孟子』講釈を聴き、義堂にも再三質問した。殊に永徳元年（一一三八二）九月、義満が「昨日儒学者講孟子書、其義各々不同、如何」と問うたとき、義堂はこれに答えて、「所見不同也、近世儒書有新旧二義、程朱等新義也、宋朝以来儒学者、皆参我禅宗、一分発明心地、故註書与章句学、迥然別矣、四書尽於朱晦庵、庵及第以大患書一卷為理性学本云々」と説明し、その後また義満の質疑に答えるときも

努めて儒積の異同に言及した。この年末、義満は諸儒の『孟子』講釈が終ったことを義堂に告げ、次に『大学』を聴くことについて意見を求めた。義堂はこれに対し、「大学乃四書之一、唐人学四書者、先読大学、意者、治国家者、先明德正心誠意修身、是最緊要也、敢請、殿下四書之学弗怠、則天下不待令而治矣」と説き、やがて義満が諸儒の『大学』『中庸』講釈を聴き終ったとき、義堂は改めて四書の次第を略説し、学庸二書こそ「治世之書」であると推奨した^⑭。

かつて応安五年（一三七二）義堂がまだ鎌倉にいて衆のために『輔教編』を講じた後に、「俗人入寺宜問法、僧入俗舍宜説法、今時、則不然、僧俗会合、共談世上治乱、以為茶飯、是乃吾徒之過也、非俗人之過也」と述べた。僧侶が為政者の化導に努めるとも、僧侶みずから政事にかかわることは義堂の好むところではなかった。しかし京都と関東と、双方の恩顧にあずかった義堂が東西間の緊張に際会しては、みずから居中調停に当らざるを得なかった。康暦元年（一三七九）近畿の諸將にして管領細川頼之に抗する者が続出したとき義満は使を関東に下して援軍を求めた。氏満はこの機に乗じ、大兵を京都に上せて義満に背こうとした。関東管領上杉憲春は氏満を切にいさめたが聴かれず、この年三月自殺した。氏満はこれを悔い、憲春の弟憲方に軍を授けて義満救援の途に就かせ、義満の命を奉じて憲方を関東管領とし、更に使僧を上京させて極力陳弁せしめ、ようやく事なきを得た^⑮。しかし義満はその後永徳年間に入ってもなお氏満の心事を疑い、これにつきしばしば義堂の所見を求めた。義堂はその都度「勿聴流言」「莫聴小人讒言」と懇請し、また「東西兩府和睦、可以安天下也」と力説した。この間の義堂の言説が儒教よりも仏教に傾いていることは注目ししよう。例えば永徳二年九月、義満との談話が関東の事に及んだとき、義堂は「勿聴讒言、則天下安全、若一念動、則天下動、一切毀譽不動、則内外魔不能侵」と説き、同十二月義満が「関東幕府武威殺罪等事」に言及したのに対しては「府君但行慈悲、則与仏在世無異也」と諭した^⑯。これよりさきこの年二月、義堂はにわかにな『論語』の講釈を命ぜられ、極力辞退したが、かえって義満から「儒積雖異、其帰善是同、何必拘其跡哉」といわれ、やむなく十余章を講じて仏教宗門中の事に及び、「檀越但信自心是仏、無事不弁」と説き、また同年末義満が諸儒の『論語』講釈を聴いて得た疑義を呈したとき、義堂はかの『輔教編』を引いて、「儒謂之五常、釈謂之五戒、其名異義同、仏初為下根凡夫説入天乘、即五戒十善也、然則仏教得兼儒教、儒教不得兼仏教」といい、また「中庸」の二字については、「喜怒哀楽未発謂之中、発而中節謂之和、和即庸也、謂未発即仏教一念未生以前也、這箇田地、非識情能所及、但能忘情者得到云々」と述べた^⑰。なおさきに永徳元年（一三八一）九月、義満が諸儒の講義に不同のあ

るゆえんを問うたとき、義堂が「宋朝以来儒学者皆参吾禅宗、一分発明心地、故註書与章句学迥然別矣」と答えたことは前記の通りであるが、同じくこの年九月、義堂は前関白太政大臣二条良基の「儒書新旧二学不同如何」という質問に対しても、「漢以来及唐儒者、皆拘章句也、宋儒乃理性達、故釈義太高、其故何則皆以参吾禅宗也」と返答している。当時並ぶものなき公武の貴顕に対し、宋儒の達識が専ら禅学を負うところであることを、これほど端的に表現した上に、儒釈の同異、禅儒の優劣につき、毎々精到に解説し、当時二十五歳の大檀那義満をして、ついに禅門に帰投させたからには、もはや「助道之一」たる宋学について更に説くべきいわれはなかった。宋学の講究をあくまで禅学提唱の方便にとどめようとする禅徒の功利主義は義堂の場合にこそ最も顕著な成果を収めた。彼の『空華日用工夫略集』にも、永徳三年五月条に義満の問に対し義堂が『礼記』を引いて答えたところ、義堂の義は期せずして元の陳鴻の『礼記集説』に一致したという一条を最後として、以下には儒学に関する記載はほとんど見えず、代わって義堂が義満を助けて五山制の整備等に貢献した記事などが著しくなる。¹⁰⁾

〔注〕

- ① 以下詳細は拙著『日本宋学史の研究』（吉川弘文館、昭37）八七ページ以下、同『中世の儒学』（同、昭40）六六ページ以下参照。
- ② 『泉涌寺不可棄法師伝』。
- ③ 無準師範『入内引対陞座語録』（足利衍述『鎌倉室町時代之儒教』四二ページ所引）。
- ④ 『聖一国師年譜』『東福紀年録』。足利前掲書四二ページ以下。
- ⑤ 『大覚禅師語録』『仏光禅師語録』。
- ⑥ 唐僧圭峰宗密『禅源諸詮集都序』卷上（岩波文庫本）八〇ページ。武内義雄『中国思想史』（岩波全書）二四四ページ。
- ⑦ 『海蔵和尚紀年録』『済北集』通衡。
- ⑧ 『中岩和尚自曆譜』（『統群書類従』伝部所収）。但し中巖の自記に係る部分は貞治六年条までで、以下は門人の追記である。また『中正子』は『新校群書類従』雑部所収。ここに引くのはその「問禅編」の一節である。
- ⑨ 以下義堂の言行は主として『空華日用工夫略集』（太平洋社、昭17）に拠る。なお足利前掲書二七〇ページ以下参照。
- ⑩ 『空華日用工夫略集』応安元年二月二十五日、同四年六月六日、九月二十八日、十二月十六日条。
- ⑪ 同上書応安四年二月十八日、同五年二月十日、二十六日、同六年二月一日、同七年十月二十四日、永和元年二月七日、七月十三日、応安五年三月一日、永和二年八月五日条。
- ⑫ 観中中諦『青瑠集』。義堂『空華集』卷二および卷九。『空華日用工夫略集』応安六年十一月二十五日条。

⑬ 『迎陽記』康暦二年四月八日条。『空華日用工夫略集』康暦二年八月十八日、十一月七日、永徳元年九月二十二日、二十七日、十一月七日、十二月二日、三日、二十七日条。なおこの十二月二日条によれば、この日義満が『孟子』の疑処について質問したとき義堂は『孟子』の倪氏集注を引いて詳細に答えたという。これは義堂が既に近刊の元の倪士毅の『四書輯釈』まで読んでいたことを示すものである。

⑭ 『史料綜覧』康暦元年三月七日、十三日、四月十七日、五月二日条。渡辺世祐『關東中心足利時代之研究』（岩波書店、昭8）二〇六ページ以下。

⑮ 『空華日用工夫略集』永徳元年十一月七日、同二年九月二十九日、十二月十四日、二十四日、同三年六月七日、八月五日、七日条。

⑯ 同上書永徳二年二月二十九日条。

⑰ 同上書永徳元年九月二十二日、二十五日、同三年五月二十四日条。

三

過ぐる応安七年（一三七四）、当時まだ鎌倉にいた義堂が氏満に学問の必要を説き、菅原豊長の講釈を聴くように勧めたことは既に述べた。

これによって豊長の関東下向ももと義堂の推薦に係るとする向きもある。しかし豊長の東下は先代基氏の世、貞治年間のことであるにもかかわらず、義堂が豊長の来訪を受けて、「乃知令父（為嗣）為北野長者、是乃天神子孫、為菅氏者、儒道四家其一也」などと珍しそうに日録に記したのは永和元年（一三七五）のことである。その後康暦二年（一三八〇）五月、豊長の長子長方が義堂に受衣して法名道文を得たのは、これを名ごりとして豊長一家が鎌倉を引揚げようとしたのではないか。義堂の詩集に「餞粟田口武衛相公帰省詩」が見え、義堂はその序の中で貞治以来の豊長の所業が基氏・氏満以下を薰化し、人みな彼を孟子の再来と称したことを述べている。義堂と豊長との親交はこれを認めて妨げないであろう。しかし義堂が果して菅家の学から何を得たかについては、なおしばらく疑いを存しなければなるまい^①。

建仁入院の事が、義堂の辞退にもかかわらず急速に進展し、義堂がついに上京の途につくことになったのは、右の長方の受衣の直後、康暦二年二月であった。菅原秀長の手記には、この年義堂入京後の夏、武家の文談の式日ごとに秀長が召されたことが見え、なお六月には義満が密々北野に参り、三条西公時・万里小路嗣房・菅原秀長・清原良賢を会して文談を催したことも載っており、次いで八月一日、八朔の祝儀に当り、秀長が新写の『孟子』一部を義満に進め、礼物を受けたという記事もある。この八月には秀長は義堂を訪れて自作の和歌の序を示し、その添削を求めている。そして翌九月以来、義満が儒学者の講ずる『孟子』の義におのおの不同あることを始め、その他『孟子』の疑処について、しき

りに義堂に問い、義堂が喜んでこれに答え、ますます学問を勧めたのは、右の秀長の新本献上の成果を一層ゆたかならしめたことであろう。菅家の経学は主として新注に拠ったと推察されているが、義堂と秀長との学問的相承関係については、さきの義堂と豊長との場合と同様、これという手がかりも見当たらない^⑧。ただ当時の武家の文談の実際をうかがうべき貴重な史料は大東急記念文庫蔵清原宣賢自筆『孝経秘抄』一冊の奥に附載された「孝経論議」一葉の左の記文である。

昔天山相公（義満）治世之余暇、引菅原秀長・藤俊任・明経清原良賢、以孝経為論議、座有二条撰政（良基）・義堂和尚、不記問者講師誰某、問、孝経誰人所作哉、答、劉炫述議云、孔子身手所作也、難云、説宣之旨、其疑未散、曾子行孝、既有重名、適陪大聖閑居暇、得聞孝之終始、逐集録之、経初章云、仲尼閑居、若孔子自作、則何得自称字耶、故安国拠此句為曾子所録、何其今為孔子作耶、答、被難之旨尤為淺近、案春秋緯云、吾志在春秋、行在孝経、加之、鄭玄六芸論云、孔子既叙六経、題目不同、指意殊別、恐斯道離散、後世莫知其根原所生、故作孝経以総會之、然則大聖自所記、豈出曾子筆耶、曾子於弟子之中得孝名、故假曾子問説之、（下略）

ここに名を連ねた人びとのうち、その学統・世寿ともに明らかでない藤原俊任を除けば、その没年の最も早いのは良基と義堂で、ともに嘉慶二年（一三八八）である。したがってこの「孝経論議」が行われたのは、義堂が帰京した康暦二年（一三八〇）以後、嘉慶二年以前の八年間のうち、特に義満が義堂の勧めに従って諸儒の文談・論議を聴くに最も熱心であった永徳年間（一三八一―一八三）のこととみるのが妥当と思われる。次にこの論議の焦点は『孝経』の作者の考定である。これについては古来中国にも定説がなく、漢代には鄭玄はこれを孔子の作とし、孔安国は曾子の作としたが、孔氏伝は梁乱に滅び、鄭注もまた多くの疑義を招いた。隋代に入り、劉炫が孔伝を入手し、『孝経』を孝道に関する曾子の質問に仮託した孔子の自作であるとして『孝経述議』を著した。唐の玄宗は諸注の信疑の一定せざるを憂い、開元七年（七一五）みづから諸家の説を取り、傍ら孔鄭二注を参酌して『御注孝経』を作った。わが学令は『孝経』については孔鄭二注を教授の正業とし、のち貞観二年（八六〇）に至って『御注孝経』を学官に立て、ただ特に孔氏伝に志ある者には兼ねて孔伝を試用することを許した。しかし当時わが学徒の間に盛行したのは孔氏伝と、これを更に疏釈した劉炫の義であり、清原家でも孔伝と劉義とを参考とした家本を伝えること、かの清家中興の祖大外記頼業以来、ここに紹介した『孝経秘抄』の筆者宣賢まで、連綿十四代に及んでいる。しかればこの『秘抄』に附された「孝経論議」におい

て、孔伝を引いた問者に対し『述議』に拠って『孝経』を孔子の自作と断じた答者が清原良賢その人であることは、あえて疑うまでもないであろう。^③

良賢は清家の嫡流、かの大外記頼業の九代の孫で文翁と号した。応安六年（一三三三）二十六歳のとき『古文尚書』を後円融天皇に進講、文殿寄人に補せられ、永和元年（一三七五）には五条大外記すなわち清家の庶流頼元の家本『礼記集説』をもって禁裏の御読に候し、翌年また『礼記』を進講した。『礼記集説』は元の陳鴻の手に成り、『礼記』の代表的な新注書である。これをしも宮中に携えた良賢は、もとより家学の伝統を墨守する人ではなかった。康暦元年（一三七九）良賢は將軍家の家司となり、翌年義満が内々北野に赴いて文談を行ったときも菅原秀長とともにこれに参った。^④次いで永徳年間義満が諸儒の『孟子』講釈を聴き、学者たちの義に不同あるゆえんを義堂に問い、近世儒書に新旧二義ありとの答を得た時期とその後数年間に清家の伝統的家説とは異った新義を唱えたのも実は良賢に外ならなかったことを暗示するのは京都大學蔵清原宣賢自筆本『孟子趙注』巻末篇叙の奥に見える次の記文である。

「御奥書如_レ斯、孟子篇叙、人々本無_レ之、仍先達等未_レ加_レ点、又不読_レ之、余至徳三載（一三八六）講談之次、以_レ辭案_二加_レ点、本経点多以違_レ義理_一之間、又_レ以_レ改正之_二而已、

藏氷軒文翁良_賢

嘉吉元年（一四四一）八月廿五日、以_レ曾祖父（良賢）之御説授_レ嫡男主水正兼直講宗_一、此本御奥書如_レ斯、可_レ為_レ証本_一矣、

環翠軒言翁業_忠

（伏原）

これによれば清家の『孟子趙注』は巻首に題字、各章に章指、巻末に篇叙を具備する唐初の伝本であったが、かような三者具備の完本は他家には伝存せぬため清家の先達もあえて篇叙に加_レ点、訓読しなかったところ、今良賢が講談の機会に初めて加_レ点し、その際本経の点をも多く改正したが、この改正に際し良賢は必ずしも古注を墨守しなかったらしい。しかしこの良賢の『孟子趙注』が以後長く清家の証本とされたことは右の業忠の識語によって明らかである。將軍家の家司として多端の身ながらかように家学の革新に努めた精励は幸いに義満の認めるところとなつた。義満は応永元年（一三九四）末將軍職を義持に譲つたが、同三年新將軍の読書始に候するのは今回は菅原秀長こそ「理運」の人であつた。

のに当日は良賢が参仕して『孝経』を授けた。良賢は博士・大外記・少納言・主水正・主税頭を歴任、大膳大夫正四位下に至り、応永四年五十五歳で出家、常宗と号し、永享四年（一四三二）年十月、八十五歳で没した。文安元年（一四四四）その十三回忌に際し贈位の議があり、清家には前例なきため問題もあったが、良賢の子頼季の手記に良賢叙三品の事は故義満の「御約束」であった由が見えたので、ついに従三位追贈の宣旨が下された^⑤。

さて清原家の新注摂取は頼元が『礼記集説』を家蔵し、良賢がその本をもって後円融天皇に侍読したところから顕著となったとはいえ、もちろん良賢一代にして清家学が確立すべくもなかった。しかし幸いに彼の曾孫に業忠が出、後花園天皇に四書五経を進講し、將軍義勝、同義政や細川勝元・斯波義敏にも『孝経』『大学』『論語』等を講じた。業忠は禅林にも知友多く、瑞溪周鳳・桃源瑞仙・天隱龍沢らにも経書を教えた。これらの講授に当っては古注をもととして時に新注を参酌した。業忠がその嫡子宗賢に曾祖父良賢の説をもって『孟子趙注』を伝授したことは前引の嘉吉元年の彼の識語の通りであるが、彼はまた先祖頼業が朱子の新注渡来以前に『礼記』中から「中庸」編を表出したという説を唱え、清家学の声価を高め、晩年大蔵卿正三位に至って出家、応仁元年（一四九七）五十九歳で没した。宗賢は父の遺訓を体し、大乱の中にも家業を維持し、これを養子宣賢に伝えた。宣賢は実は吉田兼俱の三男で、文龜三年（一五〇五）清家を継ぐころ学庸については新注、論孟については古注を本として「明経家の四書」を整備し、なおその他の家本の書写点校に努め、これらの手校本をもって皇太子知仁親王・將軍義晴等公武の貴顕のために講釈した^⑥。その講説の内容は、論孟の場合にも新古二注を併取したが、更にそれを宣賢の私記に即して例示すれば、まず『大学聴慶』では、宋儒には二程子に過ぎたる人は無く、朱子の学も二程子の道を伝えるものに外ならず、もし程朱が世に出なかつたら聖人の道は孟子で絶え果てたであろうと力説し、また『孟子抄』においても朱子の『集注』を増補、細説し、殊に「程子曰、性善二字、孟子拈前聖所未発、而有功於聖門、愚亦敢曰、性即理也一句、程子拈前賢所未発、而有功於孟子」と断ずるなど大いに程朱学に傾倒している^⑦。このように宣賢は良賢以来数代にわたる清家の新古二注折衷の成果を総括したが、しかもなお『孟子抄』の「尽心章句」の解において、「性ヲ知り天ヲ知ルコトハ只心ヲ尽処ニアリ、（中略）内典ニ直指人心見性成仏ト云カ如シ、直指人心トハ尽其心ニ云、見性トハ知其性ヲ云、成仏トハ知天ヲ云ト古人述タリ」と、儒語をもって禅語を解している。宣賢は更に実家吉田家とこの吉田家に親しい一条家の神道学・神代史学からも多く学ぶところがあり、ついに道仏二教を「儒教ヨリ異端トキラフタル心」について「道教ノ虚ハ虚ニシテ無也、周茂叔が無極而太極也ト云ル無極ハ

所謂虚也、太極ハ所謂有也、仏教ノ寂ハ寂ニシテ感ズ、易ニ寂然不_レ動ト云ハ、イハユル寂也、感而道通_二天下_一ノ故ト云ハ、イハユル感ナリ、ココヲ以テ二教ヲバ異端ト云ナリ」という明快な判釈を下し、自家の家学にますます光彩を添えた^⑩。宣賢は侍従正三位を先途として五十九歳のとき出家して後も、地方の侯伯の為の出講をいとわず、殊に越前一乗谷で朝倉氏の厚遇を受けて講経の日に晩年を送り、天文十九年（一五五〇）ここに客死した。時に年七十六歳であった。江戸時代の初め、林羅山に先立って家康の昵近衆となり、近世儒学史の開幕に貢献した舟橋秀賢はこの宣賢の玄孫に当るのである。^⑪

〔注〕

- ① 『空華日用工夫略集』 応安七年十月二十四日、同永和元年七月十三日、康暦二年正月二十日条、『空華集』卷十二。足利衍述『鎌倉室町時代之儒教』一九七ページ。
- ② 『空華日用工夫略集』 康暦二年二月十三日条より三月二十日条まで。菅原秀長『迎陽記』同年四月八日、五月八日、六月二十五日、八月一日条。足利前掲書一九六一—一九九ページ。
- ③ 『漢文大系』卷五『御注孝経』解題。『日本三代実録』卷四、貞観二年十月十六日条。足利前掲書五〇五ページ以下。
- ④ 建仁寺両足院藏梅仙東通筆『古文尚書』、足利学校藏元版『礼記集説』奥書。『愚管記』 永和二年閏七月十八日条。『後鑑』 卷八十四、康暦二年六月二十五日条。『迎陽記』 同年同月二十五日条。なお『空華日用工夫略集』 永徳三年七月十六日条参照。
- ⑤ 『荒暦』 応永三年十月十六日条。『康富記』 文安元年十月二十三日条より同二十九日条まで。
- ⑥ 足利前掲書四六八ページ以下および五一六ページ以下。
- ⑦ 『康富記』 享徳三年二月十八日条。
- ⑧ 清家の家学に関するこれらの事歴の詳細については拙稿「清原宣賢とその家学」（『日本歴史』一八五号、昭38・10）に譲り、ここでは多く省略に従った。
- ⑨ 大東急記念文庫藏清原宣賢自筆『大学聴塵』 大学章句序の解。
- ⑩ 京都大学蔵清原宣賢自筆『孟子抄』 卷五滕文公章句上および尽心章句上の解。大江文城『本邦四書訓点並に注解の研究』（関書院、昭10）一〇九ページ。今中寛司「清原宣賢の孟子抄について」（『京都女子大学文学部紀要』 卷十四、昭32）。
- ⑪ 足利前掲書八六八ページ。
- ⑫ 拙稿「近世初期儒学史における二三の問題」（『大手前女子大学論集』 七（昭48））。